

新約聖書キリスト教の視点から見たイスラム教の包括的な批判

この文書は、イスラム教（コーランに示されているもの）と新約聖書キリスト教（聖書に示されているもの）との間の矛盾、およびコーラン自体の内部矛盾とされる点に関する議論の要点をまとめ、統合したものです。分析は、言及されている聖典のみに基づいており、和解不可能な相違点と潜在的な欠陥を強調しています。イスラム学者たちはこれらの問題を解決するための解釈（例えば、廃止や文脈による解釈）を提示していますが、この批判は新約聖書の視点を採用し、コーランの主張をイエスを中心とした聖書の啓示からの逸脱として捉えています。

1. コーランと新約聖書との根本的な矛盾

これらの点は、クルアーンが新約聖書の教義と直接的に矛盾したり、再解釈したりしている根本的な相違点を示しており、しばしばキリスト教の信仰を歪曲したものと描いている（例：第2章79節）。キリスト教の観点からすると、これはクルアーンが確立された啓示を改変した後代の文書であるということになる。

イエスの本質と神性

- 新約聖書：「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。…言は肉となって、わたしたちの間に宿った。」（ヨハネ 1:1、14）「神は、実に、世を深く愛されたので、独り子を与えられた。それは、御子を信じる者が一人も滅びることなく、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ 3:16）「わたしと父とは一つである。」（ヨハネ 10:30）
- クルアーン：「啓典の民よ、宗教において度を超してはならない。また、アッラーについて真実以外を語ってはならない。メシア、すなわちマリアの子イエスは、アッラーの使徒であり、アッラーがマリアに授けた御言葉であり、アッラーから与えられた魂（命令によって創造されたもの）にすぎない。だから、アッラーとその使徒たちを信じなさい。そして、『三位一体』などと言ってはならない。やめなさい。それがあなたの方にとってより良いことである。確かに、アッラーは唯一の神である。アッラーは子を持つことなどあり得ないほどに崇高である。」（第4

章 171 節) アッラーはイエスに尋ねた。「あなたは人々に『アッラーの他に、私と私の母を神として崇めなさい』と言ったのか?」 イエスはそれを否定した。(第 5 章 116 節)

- 矛盾点：新約聖書はイエスの神性と神の子としての地位を肯定しているのに対し、クルアーンはそれを明確に否定し、そのような信仰を過剰なもの、あるいは多神教的であると述べている。

イエスの磔刑と死

- 新約聖書（聖書）：十字架刑とイエスが霊を明け渡されたこと（死）について述べている。(マタイによる福音書 27:35、50)「わたしがあなたがたに伝えた最も大切なことは、わたし自身も受けたことですが、すなわち、キリストは聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死なれ、葬られ、聖書に書いてあるとおり、三日目に復活されたということです。」(コリントの信徒への手紙一 15:3-4)
- クルアーン：「そして彼らは言う、『我々は確かに、アッラーの使徒、マリアの子イエス、メシアを殺した』と。しかし彼らは彼を殺したわけでも、十字架につけたわけでもない。ただ、彼らに彼に似せた別の人物が作られたのだ。そして確かに、このことで意見が分かれる者たちは、疑念を抱いている。彼らは憶測に従う以外に、このことについて何の知識も持っていない。そして彼らは確かに彼を殺さなかった。」(クルアーン 4:157)
- 矛盾：新約聖書は、イエスが十字架にかけられて実際に死んだことを救済の中心として詳述しているが、クルアーンはその出来事を否定し、幻覚または身代わりによるものだとしている。

三位一体の概念

- 新約聖書：「それゆえ、行って、あらゆる国の人々を弟子とし、父と子と聖霊の名によって彼らにバプテスマを授けなさい。」(マタイによる福音書 28:19)「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてと共にありますように。」(コリントの信徒への手紙二 13:14)
- クルアーン：「『アッラーは三位一体である』と言う者たちは、確かに不信仰者である。唯一の神以外に神はいない。もし彼らとその言葉をやめないならば、彼らの中の不信仰者たちには必ず苦痛な懲罰が下されるであろう。」(第 5 章 73 節)「三位一体」と言うことを明確に禁じている。(第 4 章 171 節)
- 矛盾点：新約聖書は三位一体の神という理解を支持しているのに対し、クルアーンはそれを不信仰として非難し、多神教と同等視している。

救いと贖罪

- 新約聖書：「すべての人は罪を犯し、神の栄光に達することができません。しかし、キリスト・イエスによる贖いを通して、神の恵みにより無償で義と認められるのです。」（ローマ 3:23-24）「あなたがたは恵みによって、信仰を通して救われたのです。それはあなたがた自身によるものではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。だれも誇るようなようにするためです。」（エペソ 2:8-9）
- クルアーン：「荷を負う者は、他人の荷を負うことはない。また、人間には、自らが努力する善以外には何も無い。」（第 53 章 38-39 節）「アッラーは、魂にその能力の範囲内でしか重荷を負わせない。魂は、自らが得た善の結果を受け、自らが招いた悪の結果を受けるであろう。」（第 2 章 286 節）
- 矛盾点：新約聖書は救いをイエスの犠牲による先祖伝来の罪と結びつけているのに対し、コーランは代理贖罪を伴わない個人の責任を強調している。

過去の預言者と聖典の役割

- 新約聖書（聖書）：「神は、昔、様々な時、様々な方法で預言者を通して先祖たちに語りかけられました。この終わりの時代には、御子を通して私たちに語りかけられました。」（ヘブライ人への手紙 1:1-2）
- クルアーン：「そして我々は、彼らの足跡に倣って、マリアの子イエスを遣わし、彼以前にトラーに記されていたことを確証させ、彼に福音書を与えた。…だから福音書の民は、アッラーがそこに啓示したものによって判断すべきである。」（第 5 章 46-47 節）「ムハンマドは、あなたがたの男の誰の父でもないが、アッラーの使徒であり、最後の預言者である。」（第 33 章 40 節）「自らの手で聖典を書き、それから『これはアッラーからのものだ』と言う者たちを警告し、以前のテキストの改ざんを暗示している。」（第 2 章 79 節）
- 矛盾：新約聖書はイエスを後継者なしの究極の啓示として位置づけているのに対し、コーランはムハンマドを最後の預言者として紹介し、聖書（新約聖書の福音書を含む）が改ざんされたため、コーランが必要になったと示唆している。

これらの矛盾は、両聖典が共通する人物（イエスなど）や教義について異なる主張をしていることに起因している。新約聖書はイエスを神聖な救世主として中心に据えているのに対し、クルアーンは受肉や三位一体を認めない一神教を堅持し、キリスト教の信仰を逸脱とみなしている。

2. クルアーン内部の矛盾

これらは、聖句の記述のみに基づいて、神学的、歴史的、あるいは宇宙論的な問題に関して、聖句同士が矛盾しているように見える箇所である。イスラム教の学者たちは、こうした矛盾を、廃止（ナスフ）、文脈的解釈、あるいは言語的なニュアンスといった概念を通して解決することが多い。

天地創造のタイムライン：天と地が創造された日数

- 「汝らの守護者である主はアッラーである。アッラーは六日間で天と地を創造された。」（クルアーン第7章54節）
- 「言え。『二日間で大地を創造した方を、あなた方は否定するのか？…彼は四日間で山々を大地に置いた…そして二日間で七つの天空を完成させた。』」（クルアーン第41章9-12節）
- 矛盾点：創造の全期間は、ある節では6日間とされているが、別の節では詳細な順序を合計すると8日間になる。

創造の順序：地球が先か、天が先か？

- 「あなたがたは創造するのが難しいのか、それとも彼が築いた天の方が難しいのか？彼はその高さを高め、秩序づけた。そしてその後、彼は大地を広げた。」（クルアーン第79章27-30節）
- 「彼こそが、あなた方のために地上にあるすべてのものを創造された方である。そして彼は天に目を向け、それらを七つの大空にされた。」（クルアーン第2章29節）
- 地上の創造から始まり、天へと話が移る。（クルアーン第41章9-12節）
- 矛盾点：ある聖句では天が先に創造され、その後に地が創造されたことを示唆しているが、別の聖句では地が天よりも先に形成されたと述べている。

最初のイスラム教徒は誰だったのか？

- 「言え。『まことに、私はアッラーに服従する者たち（ムスリム）の先頭に立つよう命じられている。』」（クルアーン第6章14節）
- 「そして私は、イスラームにおいてアッラーにひれ伏す者たちの先頭に立つよう命じられた。」（クルアーン第39章12節）
- アブラハムは息子たちに言った。「アッラーはあなたたちのために信仰を選ばれた。ならば、イ

スラームの信仰（ムスリムとしての信仰）にとどまって死ぬこと以外はしてはならない。」（クルアーン第2章132節）

- モーセは、アッラーのしるしを見て最初に信仰を持った人物として描かれている。（クルアーン第7章143節）
- 矛盾点：ムハンマドは「最初の」イスラム教徒であるとされているが、アブラハムやモーセといったそれ以前の預言者たちもイスラム教徒、あるいは最初の信者として描かれている。

宗教における強制

- 「宗教において強制があってはならない。真理は誤りから明確に区別される。」（クルアーン第2章256節）
- 「アッラーも最後の審判の日も信じない者たちと戦え。彼らが自ら進んでジズヤを納め、屈服したと感じるまで。」（クルアーン第9章29節）
- 「そして、もはや騒乱も抑圧もなく、正義とアッラーへの信仰が至る所で完全に行き渡るまで、彼らと戦い続けなさい。」（クルアーン第8章39節）
- 矛盾点：ある節では宗教の強制を禁じているのに、別の節では非信者が服従するか貢ぎ物を納めるまで戦うよう命じている。

悪と誤導の源

- 「彼らに良いことが起こった時は、『これはアッラーからのものだ』と言い、悪いことが起こった時は、『これはあなた（預言者よ）からのものだ』と言う。言いなさい。『すべてはアッラーからのものだ』と。」（クルアーン第4章78節）
- 「汝に起こるあらゆる善はアッラーからのものであり、汝に起こるあらゆる悪は汝自身の魂からのものである。」（クルアーン第4章79節）
- 「アッラーが創造されたものの悪」から逃れることを求めている。これは、アッラーが悪を創造することを暗示している。（クルアーン第113章1-2節）
- 矛盾点：ある文脈では悪はアッラーに起因するとされるが、別の文脈では人間の行為や魂のみに起因するとされる。

審判の日における執り成し

- 「それゆえ、一人の魂が他の魂の役に立たず、また彼女のために執り成しが受け入れられない日が来ることを覚悟しなさい。」（クルアーン第 2 章 48 節）
- 「それゆえ、汝らは、ある魂が他の魂の役に立たず、その魂からの償いも受け入れられず、その魂の執り成しも益とならない日に備えて身を守りなさい。」（クルアーン第 2 章 123 節）
- 「その日には、慈悲深きアッラーの許可を得た者以外には、いかなる執り成しも効力を持たない。」（クルアーン第 20 章 109 節）
- 矛盾点：一部の節では執り成しが明確に否定されているが、他の節ではアッラーの許可があれば許されている。

罪の重荷を背負う

- 「重荷を負う者は、他人の重荷を負うことはできない。」（クルアーン第 6 章 164 節）
- 「重荷を負う者は、他人の重荷を負うことはない。」（クルアーン第 17 章 15 節）
- 「審判の日には、彼らは自らの重荷を完全に負うだけでなく、彼らが惑わした無知な者たちの重荷の一部も負うべきである。」（クルアーン第 16 章 25 節）
- 矛盾点：誰も他人の罪を負うことはできないのに、誤った指導者は自分が欺いた人々からさらに重荷を背負わされることになる。

ワイン：地上では禁じられているが、樂園では禁じられている

- 「信仰する者たちよ！酒と賭博は…忌まわしいものであり、悪魔の仕業である。そのようなものを避けよ。」（クルアーン第 5 章 90 節）
- 「そこには（樂園には）水の川があり、乳の川があり、酒の川がある。飲む者にとっては喜びである。」（クルアーン第 47 章 15 節）
- 天上の酒は純粋で酔わせるものではないと述べている。（クルアーン第 76 章 21 節）
- 矛盾点：ワインは地上では悪と非難されるが、天国では報いとして約束されている。

バトルの戦いにおける天使の数

- 「アッラーはバトルの戦いであなたを助けられた。私は千人もの天使を幾重にも重ねてあなたを助けよう。」（クルアーン第3章 124 節）
- 「もしあなたがたが堅く立ち続けるならば、あなたがたの主は五千の天使を遣わして、恐るべき攻撃を仕掛けてあなたがたを助けてくださるであろう。」（クルアーン第3章 125 節）
- 矛盾点：天使の援軍の数は、近い節によって 1,000、3,000、または 5,000 の間で異なっている。

死後、誰が魂を奪うのか？

- 「死に際して人々の魂を奪うのはアッラーである。」（クルアーン第39章 42 節）
- 「あなたたちを司る死の天使が、あなたたちの魂を（当然のごとく）奪い取るだろう。」（クルアーン第32章 11 節）
- 「しかし、天使たちが彼らの魂を死後連れ去るとき、彼らはどうなるのだろうか。」（クルアーン第47章 27 節）
- 矛盾点：魂を奪う行為は、アッラーに直接帰せられる場合もあれば、一人の天使によるもの、あるいは複数の天使によるものとされる場合もある。

これらの例は、クルアーンの本文が表面上は自己矛盾しているように見える箇所を浮き彫りにしている。しかし、イスラム教の解釈（タフスィール）は、クルアーンを 23 年かけて啓示された首尾一貫した全体として捉えることで、矛盾を解消する。

3. 全体的な批判：神学のおよび論理的な意味合い

クルアーンは 7 世紀に成立した文書であり、ユダヤ・キリスト教の要素を再解釈して新たな一神教の枠組みに適合させているが、その過程で新約聖書との間に和解不可能な矛盾を生み出している。神学的に見ると、イスラム教がイエスの神性と贖罪を否定することは、キリスト教福音の本質、すなわちキリストの犠牲による恵みによる救いを損なう。論理的に見ても、クルアーンが聖書の本来の真実性を肯定しながら（第5章 46-47 節）、証拠もなく改ざんを主張するならば、懐疑論を招くことになる。さらに、内部の矛盾は人間の介入を示唆しており、聖書が不変の真理を強調していることと対照的である。「イエス・キリストは、昨日も今日も、そして永遠に変わることのない方です。」（ヘブライ人への手紙 13 章 8 節）

この批判は、聖書に警告されているように、ムハンマドを偽預言者である可能性を示唆している。「たとえ私たち自身、あるいは天からの御使いが、私たちがあなたがたに宣べ伝えた福音とは異なる福音を宣べ伝えるなら、その者は神の呪いを受けるであろう。」(ガラテヤ 1:8)

4. 仮説：聖書の言葉に基づくと、イエスはイスラム教徒に何と云うだろうか

「アブラハムが生まれる前から、わたしはいる。」(ヨハネ 8:58)「わたしと父とは一つである。」(ヨハネ 10:30)「わたしを見た者は父を見たのだ。どうして『父を見せてください』と言うのか。」(ヨハネ 14:9)「偽預言者に気をつけなさい。彼らは羊の皮をかぶってあなたたちのところに来るが、内側は凶暴な狼である。あなたたちはその行いによって彼らを見分けるだろう。」(マタイ 7:15-16)「多くの偽預言者が現れて、多くの人を惑わすだろう。」(マタイ 24:11)「偽メシアや偽預言者が現れて、大きなしるしや不思議な業を行い、できれば選ばれた者たちさえも惑わそうとするだろう。」(マタイ 24:24)「皆があなたたちを褒め称えるとき、あなたたちは災いだ。彼らの先祖は偽預言者たちにそのようにしたからだ。」(ルカ 6:26)「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことはできない。」(ヨハネ 14:6)「わたしは門である。わたしを通過して入る者は救われる。」(ヨハネ 10:9)「まことに、まことに、あなたがたに告げる。わたしの言葉を聞き、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠の命を得、裁かれることはなく、死から命へと移っている。」(ヨハネ 5:24)「神は、実に、世を深く愛されたので、ひとり子を与えられた。それは、御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者は、すでに裁かれている。神のひとり子の名を信じなかったからである。」(ヨハネ 3:16-18)「すべて疲れた者、重荷を負っている者は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげよう。」(マタイによる福音書 11:28)

5. 仮説：聖書の言葉に基づくと、使徒たちはイスラム教徒に何と云うだろうか

復活したキリストの目撃者であり、教会の創始者である使徒たちは、イエスの神性を貶めたり、恵みの福音を変えたり、イエスから直接受けた教えと矛盾する「新しい」啓示を導入したりするいかなるメッセージに対しても、繰り返し警告を発した。新約聖書の観点からすれば、クルアーンが十字架刑、三位一体、そしてキリストのみによる救いを否定していることは、「別の福音」であり、御子を否定するものとして、使徒たちの最も強い非難を招くことになるだろう。

パウロ（異邦人への使徒）：

- 「あなたがたが、キリストの恵みによってあなたがたを召してくださった方を、こんなにも早く見捨てて、別の福音に乗り換えていることに、私は驚いています。それは、まさしく福音とは言えません。明らかに、ある人々があなたがたを惑わし、キリストの福音を歪めようとしているのです。しかし、たとえ私たち自身、あるいは天からの御使いが、私たちがあなたがたに宣べ伝えた福音とは異なる福音を宣べ伝えるとしても、その者は永遠に裁かれるべきです。」（ガラテヤ 1:6-8）
- 「すでに述べたとおり、今もう一度言います。あなたがたが受け入れた福音とは異なる福音を宣べ伝える者がいるなら、その者は永遠に裁かれるべきです。」（ガラテヤ 1:9）
- 「愚かなガラテヤ人たちよ。だれがあなたたちを惑わしたのか。あなたたちの目の前で、イエス・キリストは十字架につけられた姿がはっきりと示されたではないか。あなたたちにただ一つだけ尋ねたい。あなたたちは律法を守ることによって、あるいは聞いたことを信じることによって、御霊を受けたのか。」（ガラテヤ 3:1-2）
- 「たとえ私たち自身、あるいは天からの御使いが、私たちがあなたがたに宣べ伝えた福音とは異なる福音を宣べ伝えるとしても、その者は神の呪いを受けるべきです！」（ガラテヤ 1:8 — パウロ自身も繰り返しているため、強調のために繰り返している）
- 「偽り者とはだれか。イエスがキリストであることを否定する者、すなわち反キリストである。そのような者は父と子を否定する者である。子を否定する者は父をも持たず、子を認める者は父をも持つ。」（ヨハネの手紙一 2:22-23、パウロの神学を反映している）

ペテロ（キリストが教会を建てた岩）：

- 「しかし、民の中には偽預言者もいたように、あなたがたの中にも偽教師が現れるでしょう。彼らはひそかに破滅的な異端を広め、自分たちを贖ってくださった主なる神をさえ否定し、速やかな滅びを自ら招くでしょう。」（ペテロ第二 2:1）
- 「多くの者が彼らの墮落した行いに倣い、真理の道を汚すでしょう。…このような人々は、水のない泉、嵐に吹き飛ばされる霧のようなものです。彼らのためには、漆黒の闇が待ち受けています。」（ペテロ第二 2:2、17）

ヨハネ（愛弟子）：

- 「愛する皆さん、すべての霊を信じてはなりません。むしろ、それが神からのものかどうかを吟味しなさい。なぜなら、多くの偽預言者が世に出て行ったからです。神の霊を見分ける方法は

こうです。イエス・キリストが肉体をもって来られたことを認める霊はすべて神からのものです。しかし、イエスを認めない霊はすべて神からのものではありません。これは反キリストの霊です…」(ヨハネの手紙一 4:1-3)

- 「偽り者とはだれか。イエスがキリストであることを否定する者、それはだれか。…御子を否定する者はだれも父を持たない。」(ヨハネの手紙一 2:22-23)
- 「私たちは人間の証言も受け入れますが、神の証言はそれよりも偉大です。…神の子を信じる者は、この証言を受け入れます。神を信じない者は、神を偽り者としたことになります。なぜなら、彼らは神が御子について語られた証言を信じなかったからです。」(ヨハネの手紙一 5:9-10)

ユダ (ヤコブの兄弟) :

- 「私は、あなたがたに、かつて神の聖なる民に託された信仰を守るために戦うよう強く勧めるために、この手紙を書かざるを得ませんでした。なぜなら、ずっと以前からその罪が宣告されていた者たちが、ひそかにあなたがたの中に紛れ込んでいるからです。彼らは不敬虔な者たちで、私たちの神の恵みを不道德の言い訳にし、私たちの唯一の主権者であり主であるイエス・キリストを否定する者たちです。」(ユダ 3-4)

使徒たちは、天使 (ガブリエル) が自分たちの目撃証言と矛盾する「最後の」啓示をもたらしたというクルアーン的主張を、まさに自分たちが警告していたシナリオ、特にパウロが「天からの天使」が別の福音を説くと明確に述べているシナリオだと捉えただろう。

6. 仮説：旧約聖書の預言者たちが、聖書の言葉に基づいてイスラム教徒に何と言うだろうか

旧約聖書の預言者たちはムハンマドより何世紀も前に語ったが、彼らの言葉は神の啓示の永遠性、神聖なメシアの到来、トーラーの契約の最終性、そして神の名において語りながらも神の以前の言葉に反する偽預言者に対する厳しい警告を確立している。聖書的な観点からすれば、ヘブライ語聖書で預言された神の子を否定しながら「預言者の封印」であると主張することは、究極の偽預言とみなされるだろう。

モーセ (トーラーをもたらした最も偉大な預言者) :

- 「もし預言者、あるいは夢によって予言する者があなたたちの間に現れ、しるしや不思議な出来事を告げ、そのしるしや不思議な出来事が起こった後、その預言者が『他の神々 (あなたたちが知らなかった神々) に従い、それらを拝もう』と言うならば、あなたたちはその預言者の言

葉に耳を傾けてはならない。…その預言者は必ず死刑に処せられる。…あなたたちの神、主は、あなたたちが心を尽くし、魂を尽くして主を愛しているかどうかを試しておられるのだ。」(申命記 13:1-3,5)

- 「しかし、わたしが命じていないことをわたしの名によって語る預言者、あるいは他の神々の名によって語る預言者は、必ず死刑に処せられる。」(申命記 18:20)
- 「主は私に言われた。『…わたしは彼らの同胞イスラエル人の中から、あなたのような預言者を彼らのために起こし、わたしの言葉をその口に授ける。…もし誰かが、その預言者がわたしの名によって語るわたしの言葉に耳を傾けないなら、わたし自身がその者を裁くであろう。』」(申命記 18:17-19 — 7世紀のアラビアの預言者ではなく、キリストにおいて成就した預言)

イザヤ (メシア預言者) :

- 「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれ、ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。…その名は、不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君と呼ばれる。」(イザヤ書 9章6節 — コーラン4章171節の神に息子がいることを否定する記述と真っ向から矛盾する)
- 「見よ、わたしのしもべ、わたしが支える者…わたしは彼にわたしの霊を授ける…島々は彼の教えに希望を託す…彼は地上に正義を確立するまで、ひるむことも落胆することもない。」(イザヤ書 42:1-4 — マタイによる福音書 12:18-21 ではイエスに当てはめられており、ムハンマドには当てはまらない)
- 「だれが私たちのメッセージを信じただろうか?…彼は私たちの背きのために刺し貫かれ、私たちの罪のために打ち砕かれた…主は私たちすべての罪を彼に負わせた。」(イザヤ書 53:1-6 — 十字架につけられた苦難の僕について述べているが、コーラン 4:157 では否定されている)

エレミヤ:

- 「預言者たちはわたしの名によって偽りを預言している。わたしは彼らを遣わしていない。彼らはあなた方に偽りの幻、占い、偶像崇拜、そして自分たちの心の錯覚を預言している。」(エレミヤ書 14章14節)
- 「預言者たちがあなた方に預言することに耳を傾けてはならない。彼らはあなた方に偽りの希望を抱かせる。彼らは主の口から出た言葉ではなく、自分たちの心からの幻を語っているのだ。」(エレミヤ書 23:16)

マラキ (旧約聖書の最後の預言者) :

- 「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたに遣わす。…さもなければ、わたしは来て、この地を徹底的に滅ぼすであろう。」（マラキ書 4 章 5-6 節 — マタイによる福音書 11 章 14 節のイエスの言葉によれば、洗礼者ヨハネにおいて成就し、旧約聖書の預言の系譜を締めくくる）

ダビデ（預言者であり王であり詩篇作者）：

- 「彼の息子に口づけせよ。さもなくば彼は怒り、あなたの道は滅びに至るであろう…彼に避難する者はみな幸いである。」（詩篇 2:12）
- 「主はわが主に言われる。『わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右の座に着きなさい。』」（詩篇 110:1 — マタイによる福音書 22:41-46 でイエスがご自身の神性の証拠として引用した箇所）

旧約聖書の預言者たちは、自分たちが予言した神の子を否定したり、証拠もなく律法を改ざんしたものと再解釈したり、新しい律法を追加したりする、後世の預言者としての主張を、モーセとエレミヤが非難したまさにその欺瞞、すなわち「命じられていない言葉を語り」、神は決して変わらないと誓った永遠の契約から人々を遠ざける行為とみなした（詩篇 89:34、105:8-10）。

この改訂版文書は、旧約聖書の預言者からイエスとその使徒に至るまで、聖書全体を通して、永遠の御子を軽んじ、恵みを善行に置き換えるような啓示に反対する、より包括的な聖書的見解を提示しています。「イエス・キリストは、昨日も今日も、そして永遠に変わることはない方です。あらゆる異端の教えに惑わされてはなりません。」（ヘブライ人への手紙 13 章 8-9 節）